

日本中國學會報 第六十九集  
二〇一七年十月七日 發行 抜刷

## もう一つの『李卓吾先生批評西游記』

——「傳奇四十種」所收『楊東來先生批評西游記』及び  
『一笠箠批評玉簪記』の書名改刻をめぐって——

# もう一つの『李卓吾先生批評西游記』

——「傳奇四十種」所收『楊東來先生批評西游記』及び

『一笠庵批評玉簪記』の書名改刻をめぐって——

上原究 一

はじめに

先に拙稿『李卓吾先生批評西游記』の版本について（『日本中國學會報』第六三集、二〇一一年。以下「前論」と稱す）において、甲本・乙本・丙本の三版が知られていた『李卓吾先生批評西游記』各種の關係を檢討し、廣島縣に二本が現存するのみの丙本こそが、萬曆（一五七三—一六二〇）三十年代の後半に刊行されたと思われる初刻本の版本による遞修本であることを明らかにした。現存の丙本二本はいずれも李卓吾の名がほぼ全て版木から削り取られた状態で刷られているので、初刻時の姿と區別するために、その處置を受けて以降のこの版本による印本を、特に廣島丙本と呼ぶこととした。甲本は廣島丙本（但し現存の二本よりも刷りが早いもの）を底本とする崇禎年間の翻刻本で、乙本は甲本の變則的な覆刻本である。また、前論の初出後に、廣島丙本になる以前の丙本を底本とする翻刻本と思しき新たな版本の後修本（存一卷）を、潘建國氏がパリ國立圖書館で発見された（注一博論一二三頁参照）。注一博論ではこれを第四の李卓吾評本と認め丁本と呼稱することを提唱したので、本論ではその呼稱を用いる。

前論で扱った『李卓吾先生批評西游記』各種は百回本の章回小説『西游記』の一系統をなすものだが、明代に刊行された西天取經故事を扱う作品は、百回本の章回小説ばかりではない。回数を明示しない分則本形式の章回小説として全四十則の陽至和編本や全六十七則の朱鼎臣編本があるほか、章回小説とは内容を大きく異にする六卷二十四齣の長篇雜劇も一本だけ現存している。それが宮内廳書陵部藏「傳奇四十種」に收める『楊東來先生批評西游記』六卷である。これは大正末期に鹽谷溫氏の主導で各地の小説・戯曲刊本が調査された際に見出されたもので、一部の曲辭が戯曲の選集に引かれるのが知られるのみだつた西天取經故事の雜劇作品が完全な形で発見されたということ、當初から大いに注目された。鹽谷氏は昭和二年（一九二七）から三年にかけて『斯文』誌上に句讀返點を加えた翻刻を連載した後、それに卷首・大尾及び插畫全點の影印を附した鉛印本『棟劇西游記』（斯文會、一九二八年）を刊行している。

この『楊東來先生批評西游記』は、萬曆甲寅歲（四十二年、一六一四）孟秋望日彌伽弟子書於紫芝室」と末尾に署名する「西游記小引」と、「勾吳蘊空居士書於宙合齋」と末尾に署名する「楊東來先生批評西游

「記摠論」とを冒頭に持ち、巻一首葉の第一、二行に「楊東來先生批評西游記卷之二／（低十二格）元 吳昌齡 撰」とある。しかし、このうち「元 吳昌齡 撰」については夙に孫楷第氏が、吳昌齡の作品は別物で、この長篇雜劇は實際には明初の楊景賢（楊景言や楊景夏とも）の作であることを論證し、不動の定説となつてゐる。また、「西游記小引」末尾の署名のうち「甲寅」の二字が明らかに埋木による改刻であることが太田辰夫氏<sup>④</sup>と磯部彰氏<sup>⑤</sup>によつて指摘されている。圖一が該當箇所<sup>⑥</sup>の書影で、改刻の痕跡はなるほど一目瞭然である。更に、磯部氏は續けて、この版本の書名についても次の指摘を行つてゐる（磯部注5書三三四頁）。

楊劇西游記は、「楊東來先生批評」と銘を打つてあるが、その「楊東來」という名稱も埋木である。おそらく、小引の「甲寅」と共に、重刊の際になされたのであろう。このことは、萬曆當時、□□□先生批評と銘打つことを避ける必要があつたことを示唆するのではないだろうか。批評家などで第一人者は「李卓吾」先生であるが、彼は萬曆中期に反逆の罪状で官の取締りをうけるに至つてゐる。楊劇西游記が内府・官刻本の系譜にあつたとするならば、□□□先生が反體制側の人物ではきわめて不都合であり、その名稱を削除することが望まれたであらう。筆者は、楊東來の名稱の以前は、「李卓吾」と刻名されてゐたのではないかと想像する（『戲暇』卷三「贗籍」の李卓吾批點小説類<sup>⑦</sup>。磯部「明末における『西游記』の主體的受容層に關する研究」参照——『集刊東洋學』第四四號、一九八〇）が、決め手に缺けるため斷言は差し控へたい。また、『傳奇四十種』の『玉簪記』にも、「一笠箴批評玉簪記」と記す部分と「徐文長先生批評玉簪記」と記す部分がある。後者の「徐文長」三文字は、

やはり埋木らしい。これらの「埋木」が、『傳奇四十種』本の刊行の際になされたのか、或は、それぞれが四十種にとりそろえられる以前になされてゐたかは判然としない。

圖2、9が「楊東來」の名が見える全ての箇所であるが、「楊東來」の三文字は、他の字より濃かつたり、行の中心軸から外れていたり、隣の匡郭や界線が大きく切れていたりで、確かにいずれも不自然な形だ。また、卷二尾題（圖10）と卷四首題（圖11）の二箇所では、評者名<sup>⑧</sup>の入るべき位置が三文字分の空白となつてゐる。つまり、どの箇所も元々刻されてゐた三文字の評者名を削り、基本的にはそこに埋木によつて「楊東來」の三文字を補つたが、右の二箇所では埋木を施し忘れたということだろう。磯部氏は削られた三文字が「李卓吾」だつたのではないかと想像しつつも、確たる根據が得られず斷言を避けてゐた。しかし、その後筆者は前論において、「李卓吾先生批評」を謳つた複数の小説刊本に、「李卓吾」の名が削られた後修本があることを指摘した。してみれば、『楊東來先生批評西游記』も元の書名は『李卓吾先生批評西游記』であつたという可能性は、十分に考えられそう<sup>⑨</sup>だ。そこで本論ではこの問題の解決を圖りたい。また、磯部氏が右の引用で同時に指摘してゐる「傳奇四十種」所收の『一笠箴批評玉簪記』の書名改刻の問題についても併せて検討する。

### 一、「傳奇四十種」全體の構成について

書名改刻の問題を検討する前に、宮内廳書陵部藏「傳奇四十種」全體の構成について確認しておきたい。これは明治二十九年（二八九六）に當時の宮内省圖書寮に獻納された徳山藩毛利家舊藏書の一つである。その中核をなす第三代藩主元次（二六六七—一七一九）の蒐集した

圖1 『楊東來先生批評西游記』 小引末尾署名  
萬曆甲寅歲孟秋望日彌伽弟  
子書於紫芝室

圖2 『楊東來先生批評西游記』 摠論首題

楊東來先生批評西游記摠論

圖3 『楊東來先生批評西游記』 目錄首題

楊東來先生批評西游記目錄

圖4 『楊東來先生批評西游記』 卷一首題

楊東來先生批評西游記卷之一

圖5 『楊東來先生批評西游記』 卷二首題

楊東來先生批評西游記卷之二

圖6 『楊東來先生批評西游記』 卷三首題

楊東來先生批評西游記卷之三

圖7 『楊東來先生批評西游記』 卷五首題

楊東來先生批評西游記卷之五

圖8 『楊東來先生批評西游記』 卷六首題

楊東來先生批評西游記卷之六

圖9 『楊東來先生批評西游記』 大尾蓮牌木記

楊東來先生批評西游記大尾

圖10 『楊東來先生批評西游記』 卷二尾題

名 木叉送火龍馬 華光下

評西游記二卷終

圖11 『楊東來先生批評西游記』 卷四首題

先生批評西游記卷之四

圖12 『一笠簞批評玉簪記』 卷上目錄首題

一笠簞批評玉簪記卷上目錄

圖13 『一笠簞批評玉簪記』 卷上首題

一笠簞批評玉簪記卷之上

圖14 『一笠簞批評玉簪記』 卷上尾題

一笠簞批評玉簪記卷之上終

圖15 『一笠簞批評玉簪記』 卷下目錄首題

徐文長先生批評玉簪記卷下目錄

圖16 『一笠簞批評玉簪記』 卷下首題

一笠簞批評玉簪記卷之下

圖17 『一笠簞批評玉簪記』 卷下尾題

一笠簞批評玉簪記卷下終

もの一つらしく、寶永五年（二七〇八）の毛利元次序を持つその藏書目録たる抄本『御書物目録』に「傳奇四十種十帙」と著録されている<sup>27</sup>。また、寶曆十一年（一七六一）の新見雅宴自筆抄本『御文庫唐板書籍考』（宮内廳書陵部藏）には「一、傳奇四拾種 百六十六 八十冊」と見える。現在では帙は新補の四帙に改められているが、分冊は寶曆十一年の著録と同じ八十冊で、四十種の戯曲が各々二冊ずつに装訂されている。

鹽谷氏の調査時とともに閲覽したという長澤規矩也氏が、「續梧陰清話」（『斯文』第八編第五號、一九二六年）四〇頁で最初に概要を紹介した。松澤老泉『彙刻書目外集』に細目が著録される「傳奇四十種」なる叢書と内容が一致すること、四十種のうち三十三種までが明末清初の毛氏汲古閣刊本『六十種曲』の早印本であることが指摘され、「此本徳山藩毛利家の獻納本にて、寶曆十一年新見雅宴編の御文庫唐板書籍考（宮内省圖書寮藏、寫一冊、一四八二四、四六、三六）にも著録あり、恐らく外集著録の本も是にして、異版も合せて四十種として渡來せるものか」との推測が示されている。『六十種曲』以外の七種については、書名に「墨憨齋」を冠する三種が同版式の明版であること、『橘浦記傳奇』が繪入りの萬曆頃の明版初印本で特に美しいこと、吳門寧致堂梓で「一笠庵批評」とも「徐文長先生批評」ともする『玉簪記』が『六十種曲』所收本とは異版であるばかりか本文にも異同がある繪入りの明版であること、梨花主人編次とする『療妬羹記』が「又別の版式にて、此等よりは劣る」ものであることを指摘し、殘る『西遊記傳奇』については「吳昌齡に託すれどいかが。萬曆版にはあれど版式最も古し。已に亡びたるものかと民國人に考えられしものに減びず、快い哉」と述べている。

ほどなく久保天隨氏が「傳奇四十種と新曲十種」（『斯文』第八編第六號、一九二六年）で、『療妬羹』が森槐南舊藏の清版らしき『梨花齋四種』所收本と同版であることと、書名に「墨憨齋」を冠する三種は久保氏所藏の『新曲十種』所收本と同版であることを指摘して、「要するに、傳奇四十種は、六十種曲本三十三種の外に、新曲十種本三種、梨花齋四種本一種、その他の明版三種を包含して居るのである」（五五頁）と結論付けた上で、「傳奇四十種といふ名目は、殆んど聞いたことさへなく、曲目の類にも全然見えて居ない。そこで、鄙見を述べると、これは、元と六十種曲の凡そ半分だけであつたが、その儘では、直に端本たることが知れて、面白くないといふので、わざと順序を攪亂した上に、有り合せの似つかはしい傳奇七種を混合し、製本の體裁を揃へ、勝手に傳奇四十種といふ名を冠し、さながら、完全なる一大叢刻の如く見せかけたので、狡猾なる彼土の書肆にしては、随分遣り兼ねぬ仕事である。やがて船載の後、書賈の松澤老泉が取扱つて、徳山藩の毛利家に賣り込んだ關係上、彙刻書目外集にも麗麗しく記入したのであらう」（五五く五六頁）との推測を示した。また、『新曲十種』には乾隆五十七年（一七九二）冬鐫とあるが、その前に原刊があつたかどうかは未詳だとも述べている。

長澤氏はこれを承けて、まず「傳奇四十種と小説三十種」（『斯文』第八編第七號、一九二六年）において、「六十種曲本三十三種に七種を配したものが渡つて來たことも恐らく事實であらう」（五一頁）と認めつつも、松澤老泉の生没年（一七六九く一八二二）と、寶曆十一年には徳山毛利家に所藏されていたことから、老泉が徳山毛利家に賣つたというのはいり得ないと指摘した。續いて「再び傳奇四十種と船載書目との關係について」（『斯文』第八編第八號、一九二六年）では、「墨憨齋」



を冠する三種について、『新曲十種』本は「傳奇四十種」本と同版ながらそれに比べて著しく後印であることと、『新曲十種』という名と乾隆五十七年という刊年はいずれも封面によるものであることを指摘し、元々は別の名で明清の間に刊行されたものであろうと推定している。更に『療妬羹』も、封面に『梨花齋新樂府四種』とする叢書に収める本が「傳奇四十種」本と同版ながらそれより後印で、「傳奇四十種」本には備わっている圖も無いことを指摘し、以前「劣る」としたのは版刻を問題にしたつもりではなく初印本ではないことを言ったのであつて、これも明清の騷亂期に作られた版であらうとする。また、『一笠箠批評玉簪記』について、一笠菴こと李玉は明末清初の人で、彼が戲曲家として名を擧げたのは清代になつてからだろうと斷つた上で、「ただ此本徐文長の名を削りて一笠菴となせし痕跡あれば、此本の初刻はなほ明末か、少くとも印行は清初なり」(四九頁)と述べている。

以上をまとめると、「傳奇四十種」は、明末清初汲古閣刊本『六十種曲』と同版の早印本の端本三十三種と、明末清初刊乾隆五十七年印本『新曲十種』と同版の早印本の端本一種と、單行本か叢書の端本かは不明なもの三種(萬曆刊本『橘浦記』、同『楊東來先生批評西游記』、明末刊清初後修本『一笠箠批評玉簪記』)とで構成されている。

右の三種の叢書は、いずれも「傳奇四十種」所收本よりも版木の損傷が大きく進んだ状態で刷られた揃いの傳本が複数残っていることを確認出來た。<sup>(8)</sup>つまり、それぞれの「傳奇四十種」所收本の印刷よりも後の時点でも、どの叢書も各自の収録作品の版木が一通り揃っていたということである。従つて、「傳奇四十種」は、揃いでは印行出來なかつた複数の叢書から版木が使える作品を寄せ集めて一つの叢書と

して同時に印刷されたものだとはず考えられない。また、「傳奇四十種」の料紙は八十冊とも竹紙ではあるが、仔細に見ると元の叢書ごとに微妙に紙質が異なるようなので、その点からも同時の印とは看做し難い。よつて、久保氏と長澤氏が揃つて推測した通り、「傳奇四十種」は別々に刷られた複数の叢書の端本が傳來過程で寄せ集められ、場合によつてはそれに若干の單行本も加えて、きりの良い數に整えられたものに相違あるまい。<sup>(9)</sup>現在は八十冊とも同質の淡茶色表紙が附されて外寸も揃っているが、それは寄せ集め後に改装と裁斷が行われたためであらう。

要するに、「傳奇四十種」なるものは、徳山毛利家舊藏の一揃いしか存在しないのである。本論で「傳奇四十種」に他の叢書と同じ『』ではなく「」を附しているのは、そのような名前の叢書として印行されたのではなく、出售後の傳來過程で取り揃えられた寄せ本に付けられた呼稱に過ぎないためである。

『楊東來先生批評西游記』と『一笠箠批評玉簪記』の書名改刻について、磯部氏は『傳奇四十種』本の刊行の際になされたのか、或は、それぞれが四十種にとりそろえられる以前になされていたかは判然としない」と述べていたが、「傳奇四十種」が寄せ本である以上、前者ではあり得ない。但し、ある時点でこの二種の版木が同じ書坊の手にあつて同時に改刻された、という可能性は一應残るので、その點は本論の最後で検討することにした。

## 二、『一笠箠批評玉簪記』の原書名

まずは『一笠箠批評玉簪記』二巻の書名改刻の問題から見て行こう。この本の目録首題・巻首題・巻尾題の全ては圖12-17の通りで、巻下

目録首題のみ批評者が「徐文長」、それ以外では「一笠箴」となっている。磯部氏が埋木と看做した通り、確かに「徐文長」の三文字は不自然である。しかし、長澤氏が夙に指摘していた通り、一笠箴こと李玉（生没年不詳）が明末の崇禎から清初の康熙前期にかけて活躍した人であるのに對し、徐文長こと徐渭（一五二一～一五九三）は明代の嘉靖から萬曆にかけて活動した人物なので、明代最末期以降にしか現れ得ない「一笠箴」が後から一箇所だけ時代遅れの「徐文長」に改刻されたと見るよりは、元々は「徐文長」だったのを清初に當時流行の「一笠箴」に改め、その際に一箇所だけ變えそびれたと考える方が自然ではある。それに、卷上目録首題や卷下首題で右隣の匡郭が大きく切れている點からして、「一笠箴」の箇所も埋木によつてこの形になつたという可能性は十分にありそうだ。これは結局どうということだつたのだろうか。

この問題については、同版でより刷りの早い本を發見して概ね解決することが出來た。即ち、上海圖書館が叢書の一部としてではなく單行本として所藏する、新都青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』二卷である。この本は前から順に、末尾に「溫陵卓吾李贊撰」の署名がある行書寫刻の「玉簪記序」二葉、「李卓吾先生批評玉簪記卷上目録」半葉、その裏面から卷上の各場面を描いた雙面連式圖が十幅（丁付は目録と通して、最後の第十二葉裏は空白）、卷上本文三十三葉、「李卓吾先生批評玉簪記卷下目録」半葉、その裏面から卷下の各場面を描いた雙面連式圖が十幅（丁付はやはり目録と通し。第十一葉のみ卷上のものが再び配されていて、本物の卷下圖第十一葉は闕葉）、卷下本文四十二葉となつている。このうち「玉簪記序」の二葉だけが「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』のそれとは異版で、その他の葉は全て『一笠箴批評玉

簪記』と同じ版木で刷られているのだ。しかし、『一笠箴批評玉簪記』とは違つて、書名は卷上・下とも目録首題・卷首題・卷尾題の全てが「李卓吾先生批評玉簪（箴）記」で統一されている。

例えば、兩者の卷下目録の半葉は圖18・19の通りで、第一行の「生字を貫いている版木の横割れが共通することから、兩者が同版であることが分かる。また、その横割れは圖18では右匡郭には達していないが、圖19では右匡郭も貫いているので、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の方が刷りが遅いことが確かめられる。つまり、この目録首題は「李卓吾」とする方がより古い形で、それが後に「徐文長」に埋木改刻されたのである。なお、唯一同版ではなく覆刻になつている「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の「玉簪記序」でも、青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』では末尾にあつた李卓吾の署名がなくなつている。

卷上首の半葉も書影を見ておこう（圖20・21）。一目で分かるような特徴こそないものの、仔細に見ればやはり兩者は同版で、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の方が刷りが遅い。「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』では、第一行は「李卓吾」の部分だけではなく行全體が改刻されており、第二行では「新都青藜館」だった刊行者名が「吳門寧致堂」に改刻されている。そして、大きな違いとして、青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』が本文の上に眉批の欄を設ける（この半葉にはたまたま眉批が無いが、多くの葉に行三字の眉批がある）上下二層本であつたのに對して、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』は上層の枠ごと眉批が削り取られて單層本に變つてゐる。この點は本文の全葉で同様であるが、新都青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』の時點で眉批以外の批評は第六・十三・二十二齣の各末尾に一行ずつの短

徐文長先生批評王簪記卷下目錄	
第十六齣	寄弄 第十七齣
第十八齣	叱謝 第十九齣
第二十齣	詭媒 第二十一齣
第二十二齣	促試 第二十三齣
第二十四齣	春闈 第二十五齣
第二十六齣	秦策 第二十七齣
第二十八齣	擢第 第二十九齣
第三十齣	誑告 第三十一齣
第三十二齣	回觀 第三十三齣
	第三十四齣
	聽思 詞媾
	姑阻 追別
	占兒 相寬
	設計 情見
	重效 合慶

圖 19 『一笠箴批評玉簪記』  
卷下目錄

李卓吾先生批評王簪記卷下目錄	
第十六齣	寄弄 第十七齣
第十八齣	叱謝 第十九齣
第二十齣	詭媒 第二十一齣
第二十二齣	促試 第二十三齣
第二十四齣	春闈 第二十五齣
第二十六齣	秦策 第二十七齣
第二十八齣	擢第 第二十九齣
第三十齣	誑告 第三十一齣
第三十二齣	回觀 第三十三齣
	第三十四齣
	聽思 詞媾
	姑阻 追別
	占兒 相寬
	設計 情見
	重效 合慶

圖 18 『李卓吾先生批評玉簪記』  
卷下目錄

一笠箴批評王簪記卷之上

第一齣 標目

沁園春 末上陳女嬌密潘生俊雅姻親指腹奈兵戈驚散  
子母天涯女娘指引寄跡煙霞張公借宿詞調空誇王郎  
關會惹嗟呀潘生投觀夫遺會嬌娃○堪佳笑女才奪賸  
寫情詞怨出家豈知才郎邂逅詞章入手相思情運到難  
遮鳳鸞方就姑意會差秋江逼談淡如麻榮歸處夫妻子  
母重喜會兼陵

第二齣 命試

吳門寧致堂梓

圖 21 『一笠箴批評玉簪記』  
卷上第一葉表

李卓吾先生批評王簪記卷之上

第一齣 標目

沁園春 末上陳女嬌密潘生俊雅姻親指腹奈兵戈驚散  
子母天涯女娘指引寄跡煙霞張公借宿詞調空誇王郎  
關會惹嗟呀潘生投觀夫遺會嬌娃○堪佳笑女才奪賸  
寫情詞怨出家豈知才郎邂逅詞章入手相思情運到難  
遮鳳鸞方就姑意會差秋江逼談淡如麻榮歸處夫妻子  
母重喜會兼陵

第二齣 命試

新都青致館梓

圖 20 『李卓吾先生批評玉簪記』  
卷上第一葉表



評があるのみで、その後も批評の追加は行われていないので、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』には批評がごく僅かしかなくなってしまうている。

また、本文の葉の魚尾より上の版心題は、青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』では「李卓吾批評玉簪記」だが、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』では例外なく「(低五格)玉簪記」となっている。つまり「李卓吾批評」の五文字が本文の全ての葉の版心から削られていくのだが、これと全く同じ現象が、容與堂刊本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』百卷の遞修本と、『李卓吾先生批評西遊記』の廣島丙本とに見られることを前論で指摘した。具體的には、容與堂刊本『水滸傳』では、早印の中國國家圖書館請求記號善本一七三五八と、そこから本文の一部が改められた後修の國立公文書館内閣文庫藏本とではいずれも「李卓吾批評水滸傳」だった版心題が、遞修の上海圖書館藏殘本(存五卷)では削られて「(低五格)水滸傳」に變わっている。百回本『西遊記』の廣島丙本は比較對象となる早印本は見つかっていないが、版心題が大多数の葉で「(低五格)西遊記」である中で、三葉だけ「李卓吾批評西遊記」となっていることから、本来は全て後者の形であったと推定した。

容與堂刊本『水滸傳』の遞修本は、現存部分はいずれも巻首題の行全體を埋木改刻して行頭から空白無く「水滸傳卷之幾」としており、巻尾題は行全體を削除するか、或いは「李卓吾先生批評忠義」の九文字だけを削り取っている。百回本『西遊記』の廣島丙本は、回首題が丸ごと削られてその行が空白となるか、「李卓吾先生批評」を削って「(低七格)西遊記」となるか、「李卓吾先生批評西遊記」のまま全く削られていないか、の三通りとなっている(前論参照)。これらと同様に、

「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の書名は、本文全葉の版心題から「李卓吾批評」の五文字を削った上で、版木が作られた當初は全て「李卓吾先生批評玉簪(簪)記」であった目録首題・巻首題・巻尾題を、後から埋木改刻によつて現在の形に變えたものだったのである。

では、改刻の際に「一笠箴」とするか「徐文長」とするかで方針が一定しなかったのだろうか。おそらくそうではあるまい。「李卓吾先生批評」を銘打つ章回小説刊本から李卓吾の名が削られたのは天啓五年(一六二五)に出された李卓吾の著作への二度目の禁令に對應するためであったと前論で考證したが、その點は戯曲刊本でも同様であったと考えられる。その頃には徐渭はとうに没していたが、萬曆四十七年(一六一九)の序を持つ『新刊徐文長先生評唐傳演義』八卷(内閣文庫藏)という章回小説刊本が残っているから、當時まだ批評を假託されるのに十分な名聲を保っていたと見て良い。一方、李玉は、天啓年間にはまだ本人の作品の刊行すら確認出来ない。

してみれば、青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』の版木に對して天啓五年の禁令への對策として施された處置は、版心から「李卓吾批評」の五文字を削った上で、目録首題・巻首題・巻尾題の計六箇所全てで「李卓吾」の三文字を「徐文長」に改刻する、というものだったのではなからうか。そして、清代に入つて李玉が戯曲家として人氣を博した時期に、「徐文長先生」を「一笠箴」に變える處置が改めて行われたのであろう。「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』で唯一評者の名が「徐文長先生」になっている巻下目録首題は元々あった「李卓吾」の三文字のみを削って「徐文長」に變えたものであるのに對して、それが「一笠箴」になっている五箇所はいずれも行全體を埋木改刻している、という手法の相違があることが、右の推測の傍證とならう。

また、容與堂刊本『水滸傳』の遞修本も百回本『西遊記』の廣島丙本も、眉批は大部分が元通り残っている。いずれも眉批の部分も匡郭で圍つて上下二層にするのではなく、匡郭の上の餘白に適宜眉批を刻す形式であつたから、眉批を削ろうと思えば比較的容易だつたはずだ。してみれば、天啓五年の禁令への対策としては、眉批そのものを削る必要まではなく、隨所に記される書名から李卓吾の名を排除しさえすればそれで良かったのだろう。となると、「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の場合も、「李卓吾」を「徐文長」に改刻した時點では上層の眉欄はそのまま残されており、上層が丸ごと全て削り去られたのはそれ以降、おそらくは「一笠箴」への再度の書名改刻が行われた際のことだつたのではないだろうか。その具體的な時期は不明ながら、一七〇八年の時點で毛利元次が「傳奇四十種」を所藏していた以上、概ね十七世紀後半のことと考えられる。清代にも李卓吾の著作への禁令が幾度か出されたようなので、想像を逞しくすれば、十七世紀後半に李卓吾の名を徐文長など他の人物の名に變えた版本までもがそれと認識されて厳しく取り締まられた時期があり、対策として眉批そのものを削り去つた上で、書名も「徐文長」とは違つて「李卓吾」から改めた事例として目を付けられてはいなかつた。「一笠箴」に再度改刻された、というような経緯だつたのかも知れない。

後半頃に「一笠箴」への改刻を行つた書坊である可能性が高そうだ。尤も、寧致堂は既に「一笠箴」への改刻が施されていた版木を入手して刊行者の箇所だけを自分の名に變えたに過ぎない、という可能性も理屈の上では考えられるので、斷言は出来ない。

また、上海圖書館藏『李卓吾先生批評玉簪記』は卷上圖第三葉表・同第七葉裏・同第八葉裏に「鳳梧刻」、同第四葉裏に「鳳梧刊」と刻工署名が見え、同第六葉表には刻工署名か畫工署名を入れるつもりだつたと思しき三文字分の墨格がある。「傳奇四十種」本『一笠箴批評玉簪記』の方は、卷上第八葉裏の一つを除いてこれらを削つているが、卷下圖第十一葉（上海圖書館藏『李卓吾先生批評玉簪記』では闕葉）裏に「歛邑鮑鳳梧一手出像」とある。これはおそらく『李卓吾先生批評玉簪記』の初刻時からあつた署名で、全ての圖の畫工と刻工を徽州歛縣の鮑鳳梧が擔當していたのであろう。この人物は、他に虎林容與堂刊本の覆刻本と思しき『李卓吾先生批評紅拂記』二卷（上海圖書館請求記號善T三四〇三五）の卷上圖第二葉表にも「鮑鳳梧刻」と署名している。圖の形式・配置・數はそれを含めた容與堂刊または覆容與堂刊の「李卓吾先生批評〇×記」と題する戲曲刊本各種<sup>②</sup>と同じで、人物を少なめに抑えて風景を主とする構圖を採る點もそれらと共通する。因みに、容與堂の名が見え「李卓吾先生批評〇×記」と題する戲曲刊本各種は、全て『李卓吾先生批評玉簪記』と同じ下層が半葉十行二十二字の上下二層本で、字様も似通つている。また、本文が半葉十行二十二字という點は四大奇書の李卓吾評本の大部分とも共通するが（詳細は前論参照）、そちらの圖は全て半葉全面式で、人物を多めに描く構圖を採るものが多い。

## 三、『楊東來先生批評西游記』の原書名

續いて、「傳奇四十種」本『楊東來先生批評西游記』の書名改刻について検討しよう。この雜劇作品自體が「傳奇四十種」本でしか傳わっていない以上、より刷りの早い同版本によって確認することは不可能である。しかし、この版本そのものを丹念に見ることによってそれなりの手掛かりを得ることは出来る。

まず、この版本の各巻首題は、巻四首題を除いて「楊東來先生批評西游記卷之幾」に統一されており(圖4~8)、そのうち「楊東來」の三文字はいずれも埋木改刻を經ている。唯一の例外の巻四首題は「低三格」先生批評西游記卷之四(圖11)なので、右の箇所全てで元々あった三文字の批評者名を削除して「楊東來」に改める方針だったが、巻四首題のみ埋木を施し忘れたと見るべきであろう。

また、各巻尾題は、いずれも行頭から、巻一は「西游記一卷終」、巻二は「(低三格)評西游記二卷終」(圖10)、巻三・四・五は「西游記幾卷終」となっている。巻六には巻尾題は無いが、最終行の下方に「楊東來先生批評西游記大尾」という單行連牌木記がある(圖9)。ここ

の「楊東來」も埋木のようにだ。序目の首題は、行書寫刻の小引こそ行頭から「西游記小引」だけが、本文と版式を同じくする摺論と目録の首題はいずれも「楊東來先生批評西游記某某」であり、どちらもやはり「楊東來」の三文字が埋木である。

そして、摺論・目録・本文はいずれも下層が半葉十行二十二字の上二層で、上層には行三字の眉批が適宜記され、魚尾より上の版心題は、これらの全ての葉で下層の行頭から「(低三格)批評西游記」とな

っている。

ここで注目すべきは版心題である。前章で見た通り、容與堂刊本『水滸傳』の遞修本、百回本『西游記』の李卓吾評廣島丙本、及び「傳奇四十種」本『一笠簞批評玉簪記』の三者では、初刻時には「李卓吾批評○×△」だった版心題から、「李卓吾批評」の五文字が削り取られていた。してみれば『楊東來先生批評西游記』の版心題も、「批評」の二文字こそ残っているが、その上の低三格の部分には初刻時には批評者の名があり、それが削り去られてこの形になったのではなからうか。

右の推測は、圖22・23のように、版心題の「批」の字のすぐ上に何らかの文字の一部分らしき線が削り漏らされている葉が間々あることで裏付けられる。それが最も鮮明に残る箇所が圖22だが、「批」のすぐ上に文字の下半分と思しき筆畫が残っている。その下半分は「口」であるように見え、かつ「口」の左上に直線の横畫があつた痕跡も見える。圖23は圖22ほどはつきり形が残っていないが、やはり「口」の最下部と看做しても良さそうな筆畫が確認出来る。圖23と同程度に同じような形の痕跡が残っている葉は他にも複数ある。

更に、圖10を再度良く見て頂きたい。「評」の字のすぐ上に、やはり「口」の最下部のような形の筆畫がうつつすらと確認出来るだろう。となれば、版心題から削られた三文字と、巻首題や巻尾題などから削られて大半が「楊東來」に改刻された三文字は、やはり同じ人名であり、その三文字目は下半分が「口」である字だったと認めて良いのではないだろうか。そして、「李卓吾」はその條件に當て嵌まる。

また、三文字目ではなく一文字目の痕跡が残っている箇所が一つだけある(圖24)。これだけでは斷言は出来ないものの、「李」の右上部

圖22 『楊東來先生批評西游記』 摠論第三葉版心題

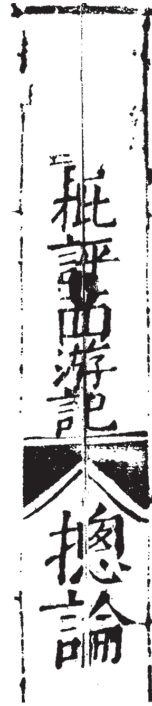


圖23 『楊東來先生批評西游記』 卷三第六葉版心題

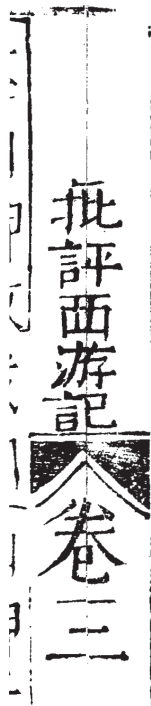
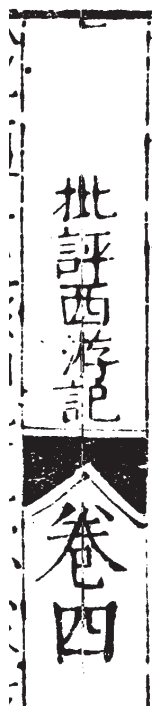


圖24 『楊東來先生批評西游記』 卷四第八葉版心題



もう一つの『李卓吾先生批評西游記』

分であつたとしてもおかしくない形だろう。

明末清初の戯曲刊本の書名に批評者として冠せられている人物の呼稱には、「李卓吾」や「墨憨齋」(馮夢龍)や「徐文長」や「一笠翁」の他にも、「陳眉公」(陳繼儒)、「魏仲雪」(魏浣初)、「玉茗堂」(湯顯祖)、「湯海若」(湯顯祖)、「袁中郎」(袁宏道)、「李九我」(李廷機)、「袁了凡」(袁黄)、「張深之」(徐奮鵬)、「鄭道圭」(鄭之玄)などがあるが、このうち三文字目の下半分が「口」なのは「李卓吾」と「湯海若」だけである。更に、「口」の左上に直線が見える圖22の痕跡に該当する文字としては「若」よりも「吾」の方が似つかわしいし、圖24に残る一文字目の痕跡は「李」ではあり得ても「湯」ではあり得ない形だ。してみれば、『楊東來先生批評西游記』の版心題や巻首題などから削られた批評者の名は、やはり磯部氏の想像された通りの「李卓吾」だったと看做して良いのではないだろうか。

因みに、冒頭で觸れた百回本『西游記』の李卓吾評丁本の版心題がやはり「(低三格) 批評西游記」なのだが、それも元は『李卓吾先生批評西游記』だった巻首題の上五文字を改刻して「○新刻全像批評西游記」とした上で、本文全葉の版心から「李卓吾」の三文字を削つたものと思われる(注1博論参照。なお、匡郭の上の眉批は削られていない)。そもそも、わざわざ本文全葉の版心から名前を削るという非常に手間のかかる處置を施されたことのある批評者の名は、管見の限りでは李卓吾しかない。その反面、李卓吾の名が版心から削られた事例は前述の通り複数存在する。また、注13、15を見るに、書名に冠せられる批評者の名が同じであれば版本の行款や版式も共通する場合が多いという傾向が認められるが、『楊東來先生批評西游記』の下層半葉十行二十二字の上下二層本という行款・版式は、容與堂刊本またはその覆刻



本各種や青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』、更には臺灣國家圖書館藏「三刻五種傳奇」所收本各種などの、巻首題を「李卓吾先生批評〇×記」とする多数の戯曲刊本と共通しているのである。しかも、前述の通り、半葉十行二十二字というのは、章回小説刊本においても四大奇書の李卓吾評本の殆どに共通する特徴であった。

これだけ多くの間接證據があるからには、削られた三文字が注13、22で擧げた中には無い批評者の呼稱であったという可能性も理屈の上では完全に排除することは出来ないといえ、『楊東來先生批評西游記』の初刻時の書名は『李卓吾先生批評西游記』であった可能性が極めて高く、積極的にそのように考えるべきだと言つても差し支えはないであろう。

餘談ながら、注18で觸れた陳含初・詹林我刊本『刻李九我先生批評破審記』二巻も、巻上でも巻下でも巻首題の批評者名がいかにも不自然で、埋木改刻と思われる。李九我こと李廷機は萬曆三十年代に宰相を務めた人物で、擧業書や通俗史書の編者や評者としては頻出するものの、小説・戯曲の評者として見える例は目下のところ他に確認出来ていない。確證は無いが、思うにこれも巻上では「刻李卓吾先生批評破審記巻上」の「李卓吾」の三文字を「李九我」に、巻下では「刻李卓吾批評破審記巻下」の「李卓吾」の三文字を「李九我先生」の五文字に、それぞれ改刻したものはあるまいか。<sup>23</sup> 同半葉十行二十四字で「刻李卓吾先生批評〇×記」という巻首題の刊本として注23に擧げた游敬泉刊本『刻李卓吾先生批評紅拂記』があるから、この推測もあながち的外れではないのではなからうか。

#### 四、残る問題について

ところで、そもそも楊東來先生とは何者なのであろうか。前章で見た戯曲刊本の批評者として擧がっている人物は、山人・官僚・戯曲家など立場は様々ながら、いずれも先生と稱されるに相應しい當時の有名人である。書名に掲げる宣傳文句なのだからそれが當然のだが、楊東來先生なる人物は違ふ。全く有名ではないどころか、發見から今日に至るまで、他に何一つ情報得られていないのだ。本論の元となつた口頭發表<sup>24</sup>を行った際に、これに關して金文京氏と大塚秀高氏から貴重なご教示を頂いた。まず金氏が「楊東來」は「李卓吾」の名を削つた際にでつちあげた架空の人名で、「東來」は「西遊」をひっくり返した言葉遊びではないかとの見解を示され、續いて大塚氏が、それならば「楊」は觀音菩薩の象徴的持物たる楊柳に繋がり、「楊東來」で「觀音が東にやつて来る」という、「唐三藏西遊」と對をなす意味になつていのではないかと述べられたのである。確かに作中で觀音菩薩が西の天竺から東の唐土に來ているので、言葉遊びだとすれば綺麗に成立している。楊東來先生なる人物の實在が確認出来る資料が今後新たに發見されない限りは、こうした可能性を想定した方が良いのかもしれない。

また、小引の末に署名する「彌伽弟子」なる人物も、誰のことだか未詳である。もつとも、こちらは宣傳文句ではないので無名の人物でもおかしくはないし、著名人がその場限りで用いた號だという可能性もあるだろう。

一方、摠論の末に署名する「蘊空居士」は、『封神演義』の作者説もある陸西星の號だと太田注4書一二一頁で指摘されている。太田氏

は他にも同じ號を用いた人物はいるかもしれないので後考に俟つとするが、現時點で筆者は萬曆年間はこの號を用いた人物を他には確認出来ていない。陸西星の生没年には諸説あつて、太田氏は(一五二〇、一六〇一?)としていたが、近年は萬曆三十四年(一六〇六)没という説が有力視されているようだ。

前論では、萬曆三十年の李卓吾著作への最初の禁令以降に刊行された李卓吾の名を冠する版本のうち、刊年が分かる最も早いものが萬曆三十五年の一種であり、それ以降は天啓前期までほぼ毎年李卓吾の名を冠する版本が出版されていたことから、禁令の影響が薄れたのは萬曆三十五年頃で、李卓吾の批評を謳う小説・戯曲が初めて現れたのは萬曆三十年代後半であつたと推定していた。しかし、萬曆三十五年を境とした根據はその年の刊本が一種現存することだけであつたから、禁令の影響が薄れたのもう少し早かつたというのもあり得ないことではなく、陸西星の没年として有力視されている萬曆三十四年には李卓吾の批評を銘打つ刊本が企畫され得る状況となつていた可能性も皆無ではない。もしこの蘊空居士が本當に陸西星であれば、摠論はその最晩年に書かれたもので、雜劇刊本『李卓吾先生批評西游記』は陸西星の死の直前ないしは没後まもなくの萬曆三十年代中頃に刊行されており、「甲寅」に改刻されている「西游記小引」末の干支も元は萬曆三十年代半ばのものだつた、ということになりそうだ。その場合、これは李卓吾批評を謳う小説・戯曲刊本として最初期のものだったことになる。だが、蘊空居士が陸西星と決まつた譯でもなければ、陸西星の没年も不確かなので、更なる検討が必要だろう。今後の課題としてい。

最後に、「西游記小引」末の署名の年次「萬曆甲寅歲」(四十二年)

のうち「甲寅」が埋木であるという點について、磯部氏は書名の改刻と同時の處理だと看做されていた。しかし、毎年立て続けに李卓吾の名を冠した書物が出版されていた時期である萬曆四十二年(前論表3参照)に、わざわざ李卓吾の名を本文の全ての葉から削り取るという大變な手間をかける必要があつたとは思えない。前論から度々述べて来た通り、「李卓吾」の名を削る處置は天啓五年の禁令への對策と見るべきである。一方、天啓後期や崇禎初期に「萬曆〇×歲」を「萬曆甲寅歲」に變える必要があつたとも思えないから、結局のところ、干支の改刻は萬曆四十二年の時點で書名の改刻とは無關係に行われていたのでなからうか。つまり、現存の『楊東來先生批評西游記』は、まず萬曆四十二年に「西游記小引」の干支が改刻され、次いで天啓後期か崇禎初期に書名が改刻された遞修本だということになりそうだ。

## 小 結

以上、本論では、前論で扱つた章回小説刊本『李卓吾先生批評西游記』の他に、異體字の相違を除けばそれと全く同じ書名でありながら、内容は根本的に異なる雜劇刊本『李卓吾先生批評西游記』も同じ萬曆後半に刊行されていたと見るべきことを論じた。「傳奇四十種」本『楊東來先生批評西游記』はその遞修本ということになるから、今後は『西游記』演變史上における重要資料としてのみならず、「李卓吾先生批評」を銘打つ小説・戯曲刊本の早期の例としても注目する必要がある。

また、同じく「傳奇四十種」に収める『一笠箠批評玉簪記』は、新都青藜館刊本『李卓吾先生批評玉簪記』の書名が二度に渡つて改められ、その過程で上層の眉欄が全て削られた上に、刊行者名も改刻された遞修本であつた。對して、『楊東來先生批評西游記』の方は書名の

改刻は一回だけのようだし、上層の眉欄も削られずに残っている。つまり、この兩者は天啓五年の禁令への對應で李卓吾の名が削られたという點こそ共通するものの、その際に書名をどう改めたかや、その後眉欄の削除があつたか否かは全く異なっている。してみれば、兩者が同じ書坊の手で同時に改刻されたとは考えにくく、別々に刊行され別々に改刻を受けた版木で刷られたもの同士が、たまたま揃つて「傳奇四十種」という寄せ本の一つとされたと見るべきであろう。

注

- (1) 加筆修正の上で筆者博士論文「百回本『西遊記』の成立と展開——書坊間の關係を視野に——」(東京大學大学院人文社會系研究科、二〇一六年。近日中にウェブ公開予定)に第四章「李卓吾批評本系の版本について」として収めたので、本論でその際の加筆修正に關わる問題に言及する場合はその旨を記す。
- (2) 『古本戲曲叢刊』や『續修四庫全書』がこれを再録するが、原本全體の影印本は未刊行。
- (3) 孫楷第「吳昌齡與雜劇西遊記」(『輔仁學誌』第八卷第一期、一九三九年)。のち同氏『滄州集』(中華書局、一九六五年)所收。
- (4) 太田辰夫「戲曲西遊記考」(『神戸外大論叢』第二二卷第三號、一九七一年)。のち同氏『西遊記の研究』(研文出版、一九八四年)所收。
- (5) 磯部彰「傳奇四十種本『楊東來先生批評西遊記』の成立時期とその刊行年代」(『富山大學人文學部紀要』第一四號、一九八九年)。のち同氏『西遊記』形成史の研究(創文社、一九九三年)に『楊東來先生批評西遊記』劇の成立とその刊行」と改題の上で收める。
- (6) (上原補)『戲瑕』は萬曆四十一年の自序を持ち、この條で李卓吾の批評を謳う小説・戲曲は本人の生前には出回つておらず、葉書による偽作が近年になつて現れた旨を述べる。詳細は前論參照。
- (7) 上村幸次編『毛利元次公所藏漢籍書目』(徳山市立圖書館、一九六五年)の常用漢字體での翻刻による。原抄本は同書目の刊行時點では徳山毛利家藏。徳山毛利家の藏書はその後ごく一部を残して山口大學棲息堂文庫に寄贈されたが、この抄本らしきものはその目録には見えない。
- (8) 長澤氏の擧げた傳本以外に、『六十種曲』は上海圖書館藏本、『新曲十種』は中國國家圖書館藏本、『梨花齋新樂府四種』は「金陵兩衡堂梓行」と記す封面を持つ中國國家圖書館請求記號善本〇四一三七が、いずれも「傳奇四十種」所收本よりも後印の一揃いであることを確認した。なお、『梨花齋新樂府四種』には、兩衡堂印本と同じく圖が無い覆刻本(中國國家圖書館請求記號善本A〇三四八四)もある。
- (9) 但し、兩氏の推定のように中國で既に寄せ集められていたという確證は無く、日本に來てから寄せ集められた可能性も皆無ではない。
- (10) 『李卓吾先生批評忠義水滸傳』には、ここに擧げた容與堂刊本各種の他、一部の版心題・卷尾題の「李卓吾」の三文字を「諸名家」に變えた覆刻本も存在する(中國國家圖書館請求記號善本〇五二六三「闕卷十一至三十」、天理大學附屬天理圖書館藏)。詳細は氏岡眞士「容與堂本『水滸傳』3種について」(『中國古典小說研究』第一九號、二〇一六年)參照。なお、氏岡氏は、筆者が前論で擧げたうち上海圖書館藏殘本については觸れていない。
- (11) 卷首と版心に容與堂の名が見えるのだが、何故これが覆刻本だと思われるかについては、近刊豫定の拙稿「虎林容與堂の小説・戲曲刊本とその覆刻本について」(『アジア遊學』(假題)中國古典小說研究の今昔)、勉誠出版、二〇一七年刊行豫定)參照。
- (12) 『玉合記』『幽閨記』『紅拂記』『北西廂記』『琵琶記』の五種が知られ

ているが、その全てに複数の版があることが今回の調査の過程で分かった。その状況については注11拙稿で述べる。

- (13) 『鬲鐃陳眉公先生批評西廂記』二卷（臺灣國家圖書館藏）など、蕭騰鴻師儉堂刊・半葉十行二十六字で巻首題が「鬲鐃陳眉公先生批評○×記」の戯曲が複数ある。なお、北京大學圖書館藏『六合同春』は、それらの巻首題を「鬲鐃○×記」に變える一方で次行に「雲間眉公 陳繼儒 評」と加え、版心の「陳眉公評」も残した後修本六種からなる叢書である。

- (14) 「古吳陳長卿梓」の封面を持つ『新刻魏仲雪先生批點琵琶記』二卷（臺灣故宮博物院藏）など、半葉十行二十七字で巻首題が「新刻魏仲雪先生批點（評）○×記」の戯曲が少なくとも三種あるが、記される刊行者名は様々である。

- (15) 『玉茗堂批評節俠記』二卷（中國國家圖書館藏）など半葉十行二十一字のものが少なくとも五種あり、他に行款が異なるものもある。

- (16) 管見のものは一種のみで、半葉九行二十六字の師儉堂刊本『湯海若先生批評西廂記』二卷（上海圖書館藏）。

- (17) 管見のものは一種のみで、半葉九行二十一字で三元堂の封面を持つ『新刻袁中郎先生批評紅梅記』二卷（北京大學圖書館藏）。

- (18) 管見のものは一種のみで、半葉十行二十四字で巻首上に「書林 陳含初 續梓」、巻下首に「書林 詹林我 續梓」と見える『刻李九我先生批評破密記』二卷（中國國家圖書館藏）。

- (19) いずれも版心に「環翠堂樂府」とある、半葉十二行二十九字の『袁了凡先生釋義琵琶記』二卷（京都大學人文科學圖書館藏）と、半葉十二行二十五字だという『袁了凡先生釋義西廂記』二卷（上海圖書館藏、未見）がある。

- (20) 管見のものは一種のみで、半葉九行二十字の崇禎十二年序刊本『張深

もう一つの『李卓吾先生批評西游記』

之先生正北西廂本』五卷（南京圖書館藏）。

- (21) 把握しているのは一種で、筆峯山房刊本で半葉十行二十七字だという『新刻徐筆峯先生批點西廂記』二卷（中國國家圖書館藏、未見）。

- (22) 管見のものは一種のみで、半葉九行二十五字で天啓五年の序を持つ存誠堂黃裔我刊本『鬲鐃鄭道圭先生評點紅杏記』二卷（中國國家圖書館藏）。
- (23) 但し、もちろん批評者名と行款や版式が互いに一対一で對應するといふ譯ではない。例えば李卓吾の場合、他に半葉十行二十四字の書林游敬泉刊本『刻李卓吾先生批評紅拂記』二卷（上海圖書館藏）、半葉十行二十七字の書林游敬泉刊本『李卓吾批評合像北西廂記』二卷附二卷（天理大學附屬天理圖書館藏）、半葉十行二十六字の潭陽太華劉應襲刊本『李卓吾先生批評西廂記』二卷（カリフォルニア大學バークレー校藏）、半葉九行二十字の『李卓吾先生批點西廂記真本』二卷（傳本多数で複数の版あり）などといったものもある。

- (24) 『古本戯曲叢刊初集』に影印されているので適宜確認されたい。なお、「李」は削る必要がなさそうだが、版面の状態からはこれも埋木と思しい。とりあえず李卓吾の名を削って、後から誰の名を埋めるかを考えたのだろう。

- (25) 上原究一「徳山毛利家舊藏「傳奇四十種」所收『楊東來先生批評西游記』の書名改刻をめぐる——原題は『李卓吾先生批評西游記』か？——」（宮内廳書陵部收藏漢籍畫像公開記念國際研究集會）、二〇一六年六月四日、於慶應義塾大學三田キャンパス）。

- (26) 李慶「陸西星和他的《老子道德經玄覽》——明代的《老子》研究之六」（『言語文化論叢』第七號、二〇〇三年）参照。但し、李氏はこの通説に對して再考の餘地を説いている。

- (27) この點を視野に入れて、注1博論第四章では李卓吾の評を誦う小説・戯曲の出現時期を「萬曆三十年代中頃以降」と微修正した。



※本論は日本學術振興會科學研究費平成二十四～二十八年基盤研究  
(A)二四二四二〇〇九(研究代表者:住吉朋彦)及び同平成二十七～  
二十八年研究活動スタート支援二五H〇六二三三八(研究代表者:上  
原究一)の助成を受けた研究成果の一部である。